

世界史教科書におけるイスラーム記述の分析

—前近代を中心に—

社会科学系教育・サブプログラム 21AF204

原口 芽

【指導教員】 小林 聡 中川 律 高橋 雅也

【キーワード】 イスラーム史 教科書分析 世界史B 高等学校

1. 問題の所在

私は卒業論文において、イスラーム史、特にアッパース朝期における東西交流・交易を研究したが、教職大学院に進み、教育現場で授業をおこなうにあたって、イスラーム史のエッセンスがどれくらい教科書に反映されているのかに注目するようになった。

イスラーム文明史は、近年注目され始めた歴史学の研究分野であり、研究は盛んであるが、それでも日本の一般社会に目を向けると、イスラームについての理解はあまり進んでおらず、下に述べるような欧米メディアに影響された偏見も根強い。このような風潮を是正し、現実・史実に即したイスラーム理解を培うための基本は学校教育で培われると思われるので、今後のイスラーム理解の推進のためにも学校教育、特に教科書でイスラーム史がどのように扱われているかという点に注目していく。

世界史の歴史教科書としては、現行の近現代中心の「世界史A」・前近代を広く扱う「世界史B」があるが、今回は、報告者が卒業論文でアッパース朝などを扱ったこともあり、前近代の歴史事象の教科書記述をメインに考えることとしたので、分析の主たる対象は「世界史B」となる。

2. イスラーム史・イスラーム文明に対する一般的なイメージとその是正にむけて

現代の日本社会において、イスラームといえば、テレビなどのマスメディアが報じた9.11同時多発テロやその後の紛争の印象が強く、その結果、「テロリスト」・「野蛮」・「狂信的」といったマイナス・イメージがまだまだ根付いている。これは、近現代ヨーロッパの自画像ともいえる、「進歩的」・「文明的」・「宗教的寛容性」といったイメージの対極に「東洋」を位置づけるオリエンタリズムにもとづく思考法といえ、ハンチントンに見られる「文明の衝突」の図式ともあいまって、「他者」・「敵対者」としてのイスラームのイメージは、さらに増幅し、歪んでいっている。近年の日本のマスメディアなどでも欧米発のネガティブなイメージを無批判に取り入れ、それを増幅して社会に拡散している状況がある。こういったイメージを事実として是正していくことが喫緊の課題と言えるが、教科書における公正な記述はそのためのツールの一つになると思われる。

たとえば、歴史教科書などに、イスラーム文化圏に属する人々の生活や文化やイスラーム社会の歴史発展の過程などについて、親しみや理解が増すように、教科書に各社の教科

書がどこまで踏み込んで記述をしているか、イスラーム理解のツールとしてどこまで有用であるかを検証する必要がある。その上で、個々の教員が、異文化としてのイスラームを、教育実践の場において、どこまで生き生きとしたかたちで生徒に素材を与え、理解させるかということが問われることになる。

文末の参考文献一覧で挙げたように、教育実践の場でのイスラーム理解の事例は、荒井正剛・小林春夫の著書をはじめ様々なものがあるが、報告者もこういった試みを参考にしつつも、教科書に立ち戻って、イスラームイメージの再検討をおこないたい。

3. 研究方法

この研究をすすめるにあたって、比較し分析していく世界史の教科書を決める必要がある。今回は前近代についての事象を扱うので、「世界史B」の教科書を主な分析対象とした。全国の高校で採択率の高いを見ていくと、2017年度における高校教科書「世界史B」採択冊数の順位は以下の(表)の通りである。

(表1)

順位	発行者	教科書名	冊数	占有率
1	山川	詳説世界史 改訂版	180,890	41.4
2	東書	新選世界史B	66,372	15.2
3	山川	詳説世界史	47,603	10.9
4	東書	世界史B	40,713	9.3
5	山川	高校世界史	36,041	8.2
6	帝国	新詳 世界史B	33,963	7.8

2017年度

この表から、本研究では採択率が高い山川出版社・東京書籍・帝国書院3社の出版会社の教科書における、イスラーム史に関する記述を比較することにする。分析の対象としたのは、以下の三つである。

(a) 山川出版社『詳説世界史B 改訂版』(世B310:2021年発行)

(b) 帝国書院『新詳世界史B』(世B312:2021年発行)

(c) 東京書籍『世界史B』(世B308:2021年発行)

これらの教科書の中でも、西アジア史の部分では、当然のことながらイスラーム関連の記述が豊富であり、この点についての研究もあるので、本研究では、差別化を図るため

に、西アジアの「周辺地域」におけるイスラーム化とその後のイスラーム社会の動向について、どのように扱われているかを分析していく。具体的には、以下の諸テーマについて各社教科書の記述の検討をおこなう。

- ①インド(デリースルタン朝以降の南アジア)
- ②東南アジア
- ③中央アジア(カラハン朝以降)
- ④アフリカ(特にサハラ以南)
- ⑤中世ヨーロッパ
(十字軍、レコンキスタ・12世紀ルネサンス)
- ⑥モンゴル帝国(13~14世紀)
- ⑦オスマン帝国の拡大(14世紀以降)

また他にも、イスラーム史の教科書内での割合・ページ数や、イスラーム史を何世紀から何世紀までを扱っているか、教科書内の位置付けなどについてもそれぞれの出版社の特徴を見ていき、分析していく。

4. 結果・考察

教科書は指導要領に沿って作られているので、まず、『高等学校学習指導要領(平成21年告示)』における第2章第2節「地理歴史」第2款第2「世界史B」において、イスラーム世界を扱っている部分を探すと、以下の部分がそれに該当すると思われる。

2 内容
(3) 諸地域社会の交流と再編
ユーラシアの海域及び内陸のネットワークを背景に、諸地域世界の交流が一段と活発化し、新たな地域世界の形成や再編を促したことを把握させる。
ア イスラーム世界の形成と拡大
アラブ人とイスラーム帝国の発展、トルコ系民族の活動、アフリカ・南アジアのイスラーム化に触れ、イスラーム世界の形成と拡大の過程を把握させる。

次に、報告者が各社教科書の叙述を比較してまとめた際に気づいたことを述べていく。

① インド(デリースルタン朝以降の南アジア)

南アジアは、現在でもパキスタン・バングラデシュはもとよりインドにも多数のムスリムが居住している。古代から様々な宗教が繁栄していた南アジア地域が、なぜ、どのようにしてイスラーム化したのかということは、地中海地域のキリスト教化とならぶ、宗教史上の大問題と言える。山川出版社におけるインド史のイスラーム化に関する記述は、イスラーム教の内容や特徴も記述してあることがわかった。

「イスラーム信仰が、神への献身を求めるバクティや、苦行

を通じて神との合体を求めるヨーガなどのインド旧来の信仰とも共通性があったために、都市住民やカースト差別に苦しむ人々の間に広まったのである。」

以上の文章では、イスラーム教の信仰の特徴がインドの人々に合っていたために、自然と宗教が広まっていったような捉え方ができる。

一方、帝国書院の方は、山川出版社とは少し違った見方でインドでのイスラーム教の広まりを記述している。

「外から流入したスーフィー(イスラーム神秘主義者)たちが、インドの聖者崇拜と結びつきながら信仰の拡大に努め、またムスリム商人も多く到米したため、低カースト層を中心にイスラームが広がった。」

このように、帝国書院の記述では、イスラーム教徒が一生懸命インドに広めようとしていたように捉えることができる。使う教科書によって、それぞれインドにおいてイスラーム教がどのように広まったのかの見方に違いが出てくるのではないかと考えられる。

また、山川出版社と帝国書院では、デリー=スルタン朝期にイスラーム教徒とヒンドゥー教徒は共存していたと記述されているが、東京書籍では共存していたという記述に加えて、一部の君主はヒンドゥー教徒を迫害したという内容が書かれており、この一文があるかないかで、イスラーム教に対する見方に多少ズレがでてくるのではないかと考えた。

② 東南アジア

イスラーム教の布教は、主にムスリム商人の周辺地域との交流によって行われるものであり、イスラーム教を語る上でムスリム商人は極めて重要なキーワードである。東南アジアにおけるイスラーム化においても、ムスリム商人が東南アジアに進出し始めたのがきっかけであり、山川出版社・帝国書院にはその内容の記述がなされている。

しかし、東京書籍には東南アジアにイスラーム教が本格的に広がるようになったことという記述のみであり、ムスリム商人が契機となったという内容の記述はない。ムスリム商人という用語は出てくるが、交易をしているという内容しか書かれていないのである。

また、東南アジアのマラッカ王国における商業の発展とイスラーム教の関係について山川出版社では以下のように書かれている。

「マラッカの王はイスラームを旗印にし、西方のイスラーム商業勢力との関係を教科することでそれを阻止した。そのことが、15世紀後半のマラッカ王国の有力化とイスラームの拡大の契機となった。」

とあり、また、帝国書院においても、

「マラッカの商業ネットワークの拡大につれて、島嶼部各地にイスラームが広まった。」

といったような記述がなされている。山川出版社と帝国書院はイスラームの勢力の拡大と商業の勢力の拡大は密接な関わりがあることを示していると思われる。なお、東京書籍ではそのような記述はなされていない。

③中央アジア(カラハン朝以降)

中央アジアは、イランの東部に連なる地域であり、7世紀頃からイスラーム化が少しずつ進展していったが、その後起こった中央アジアから西アジアへのトルコ(テュルク)系民族の移住も世界史上の重大事件である。こういったことを念頭に考えていくと、まず、山川出版社では、

「トルコ人のイスラーム化と西方への民族移動は、その後の世界史の展開にも大きな影響をもたらすことになった。」

とあり、また、帝国書院では、

「9世紀に始まるトルコ人の西方移動は、数世紀をかけて西へ向かうトルコ化(住民の言語のトルコ語化)と東へ向かうイスラーム化(住民のイスラーム受容)の波を引き起こし、世界史に大きな影響を与えた。」

と記述される。以上からわかる通り、山川出版社と帝国書院2つの出版社とも「世界史に大きな影響を与えた」という内容がはっきりと記述されていたのである。この結果は、東南アジアでの比較的分析結果とやや類似していた。

③ アフリカ(特にサハラ以南)

アフリカは、11世紀頃北アフリカでイスラーム教が広まった。一方、サハラ以南では、金が豊富に産出する地域であったため、ムスリム商人との交易も盛んであり、金と岩塩を交換していた歴史も有名である。そんなアフリカのイスラーム史の記述を見ていくと、東京書籍では

「8世紀以降、ムスリムの勢力が北アフリカに定着すると、ガーナ王国はイスラーム世界に金を供給した。11世紀後半のムラービト朝によるガーナ王国の征服は、西アフリカのニジェール川中流域とチャド湖周辺地域のイスラーム化を促した。その後成立したマリ王国やソンガイ王国などでは、黒人ムスリムが支配権を握った。」

このように、アフリカでのイスラーム化についてのところでも、ムスリム商人と金と岩塩を交換していたことや、そこからイスラーム化に関係する記述などはなかった。また、印象的であったのが、「黒人ムスリム」という言葉を用いた点である。他の2社は、他の地域の歴史と同じように

ムスリム教徒と記述してあるので、東京書籍は何か区別をしているのではないかと疑問が残った。

また、帝国書院では、

「キリスト教徒による国土再征服運動(レコンキスタ)が進むなかで、アフリカのサハラ西部にベルベル人によるスンナ派の宗教運動が起こり、ムラービト朝が成立した。彼らは、南ではガーナ王を征服し、北では北アフリカからイベリア半島南部に進出して、キリスト教勢力と対抗した。」

このようにアフリカのイスラーム化の記述について、「キリスト教勢力との対抗」という用語が強調されているように思われた。歴史上においてアフリカのイスラーム化の時期は、キリスト教徒による国土再征服運動(レコンキスタ)が進んでいることから関連して、強調しているのかもしれないが、一方、山川出版社は少々キリスト教に対抗した内容が書かれていたが、東京書籍では「キリスト教勢力との対抗」に似たフレーズは記述されていなかった。

また、イスラーム史において、現在のエジプト周辺を含んだ地域を支配していたマムルーク朝は、イスラーム国家としても交易が発展したことについても重要な歴史である。しかし、どの教科書にもマムルーク朝に関する内容は少なかった。

④ 中世ヨーロッパ

(十字軍、レコンキスタ・12世紀ルネサンス)

中世ヨーロッパにおいて、キリスト教とイスラーム教の関係に関する歴史は非常に重要である。ピレンヌ=テーゼなど、イスラームが地中海にもたらした影響は近年注目を浴びている。中世ヨーロッパにおけるイスラームはどのような記述をなされているのか見ていく。まず、中世ヨーロッパでキリスト教とイスラーム教がもっとも深く交わることとなったきっかけは十字軍である。出版社3社とも十字軍について、十字軍がきっかけとなって地中海交易の活性化につながったことに触れていることがわかった。もっとも詳細にはっきりと記述してあったのは山川である。

山川では十字軍を西ヨーロッパが拡大する出来事の一つとして、また地中海を舞台にした東西間での人とモノの交流の活発化のきっかけ、また文明においても大きな刺激を受けたというふうに扱っている。

「また十字軍の輸送によりイタリア諸都市は多に繁榮し、地中海貿易による東方との交易が再び盛んになりだした。これにより東西間で人とももの交流が活発になると、東方の先進文明圏であるビザンツ帝国やイスラーム世界から文物が流入し、西ヨーロッパ人の視野は拡大した。こうして十字軍をきっかけに、西ヨーロッパ中世世界は大きくさまがわりすることになった。」

東京書籍もまた十字軍を西ヨーロッパ世界の膨張と動き

として扱っている。

「十字軍に見られるような西ヨーロッパ世界の膨張は、ほかにもさまざまな動きとしてあらわれている。経済面では、地中海を経由する東方貿易が活発になり、商業と都市の発展が本格化した。また、ビザンツ文明やイスラーム文明との接触は、西ヨーロッパ世界に大きな刺激を与えた。レコンキスタは、キリスト教徒による再征服運動であり、イスラーム勢力からイベリア半島の奪回をはかった。」

帝国書院は、

「一方で十字軍運動は地中海交易を活性化させ、ヴェネツィアを初めイタリア諸都市を繁栄させた。」

このように、これまでの比較からイスラームとヨーロッパの繋がりに関する部分であるため、十字軍と地中海世界の関係について一番記述が多いであろうと予測していた帝国書院がこの記述のみであり、帝国書院のネットワーク論の中にこの中世ヨーロッパとイスラームの繋がりにはあまり重視されていないのではないかと考えた。

次にレコンキスタは、イベリア半島におけるキリスト教徒の再征服運動であり、十字軍と同じようにキリスト教とイスラーム教の接触の重要な歴史であるが、東京書籍では先ほど引用した内容のように、イスラームとの接触の一つとして挙げている。帝国書院も以下のように、同じである。

「イベリア半島では国土再征服運動（レコンキスタ）が進展し、シチリア島ではノルマンディー公国の騎士たちが南イタリアを含むシチリア王国を建国したが、いずれもイスラーム文化流入の窓口となった。」

山川では特にイスラームに関するレコンキスタの影響についての記述は特に見られなかった。

最後に12世紀ルネサンスは、十字軍によって盛んになったのは交易だけではなく、文化もまた栄えたことがわかる重要な事象である。12世紀ルネサンスに関する記述では3社とも共通して、中世ヨーロッパは文化においてキリスト教が密接に関わっていることが前提とする記述がなされていた。このことは、キリスト教とイスラーム教それぞれの文化が接触したことで新たな文化が栄えたということに間違いはないということである。また、山川出版社では

「十字軍をきっかけに東方との交流が盛んになる12世紀には、ビザンツ帝国やイスラーム圏からもたらされたギリシアの古典が、ギリシア語やアラビア語から本格的にラテン語に翻訳されるようになり、それに刺激されて学問や文芸も大いに発展した。これを12世紀ルネサンスという。」

帝国書院では

「また古代ギリシアの哲学はイスラーム世界やビザンツ帝国で研究・保存されていたが、十字軍やレコンキスタによってイスラーム世界との交流が活発化するとアラビア語訳を通してラテン語への翻訳が進んだ。」

このように、山川出版社と帝国書院は十字軍がきっかけで12世紀ルネサンスが開いたことが記述してある。

しかし、一方で以下のように東京書籍には、12世紀ルネサンスに関する記述のところに、西ヨーロッパの文化発展においてビザンツ文明やイスラーム文明が影響していることは記述しているが、十字軍やレコンキスタがきっかけになったという文章はなかった。十字軍のほうでイスラーム文明との接触について触れているが、文化の方では詳細に12世紀ルネサンスと十字軍の関連を記載していないので、重要視していないと考えられる。

「これらの古典やアラビアの学術書は、シチリア島のトレドなどを経由して、西ヨーロッパに伝わりラテン語に翻訳されて広まった。このように西ヨーロッパの学問の発展には、ビザンツ文明やイスラーム文明の影響が大きく、この文化吸収は「12世紀ルネサンス」と呼ばれる。」

⑤ モンゴル帝国（13～14世紀）

モンゴル帝国は、ユーラシア世界を統一したことで、東西の交流がさらにしやすくなり、交易が活性化した時代である。イル＝ハン国や元などモンゴル帝国は駅伝制を実施し交易がしやすいようにしたが、これはもともとの交易活動、交易ネットワークにモンゴル帝国が便乗した結果である。このもととあった交易ネットワークを使って活躍していたのがムスリム商人である。つまり、モンゴル帝国における交易活動の繁栄においてムスリム商人は非常に重要な役割を果たしており、また中国にイスラーム教が伝わるなど重要な時代となっている。これらを踏まえて見ていくと、出版社3社とも、東西交易が活発になったこととムスリム商人が活躍したという記述がなされていた。

なかでも特に帝国書院はネットワークという言葉を用いて、ユーラシアでの大交流を詳細に記載していた。また、以下のように、帝国書院のみ、ムスリム商人の他にウイグル商人も商業に活躍していたことと記述があった。

「このような陸上と海上のネットワークを生かして遠距離の商業に活躍したのが、仏教徒のウイグル商人とイラン系のムスリム商人である。」

ウイグル商人とは、モンゴル帝国成立以前から東アジアで活躍していた商人である。モンゴル帝国初期はムスリム商人とともに活躍していたが、交易においてムスリム商人が大きく台頭し次第に姿を消していった。帝国書院は、世界の

交流、ネットワークを重視しているため、モンゴル帝国時代に交易で活躍したのはムスリム商人だけでなく、ウイグル商人もいたと詳細に記述がなされているのではないかと考える。

山川出版社は、モンゴル帝国全体の内容の記述は3社の中でもっとも少なかった。そして特にモンゴル帝国のなかの元について詳細に記していた。

「元の時代には、中国もモンゴル帝国の広域的な交通網の中に組み込まれ、長距離商業が活発となった。モンゴル帝国は、初期から交通路の安全を重視し、その整備や治安の確保につとめ、さらに駅伝制を施行した。その結果、おもにムスリム商人の隊商によって、東アジアからヨーロッパに至る陸路交通が盛んに行われた。」

このように元の内容の中に駅伝制や交易に関する記述があり、中央アジアというよりも東アジアの歴史の一部として組み込んでいる。

⑦オスマン帝国（14世紀以降）

オスマン帝国は、ビザンツ帝国を滅ぼすなど、アジアからヨーロッパに至るまで大きな支配を行なったイスラーム国家である。また、ユーラシア全体を支配したため、東西における交易がより活発になり、そこでもまたムスリム商人が活躍した。この時、ヨーロッパの商人もまた交易に従事し独自の通信網で活躍した。このことを踏まえて見ていくと、東京書籍では

「オスマン帝国では強力な中央集権体制がとられ、宰相以下の官僚制度が整備されたが、絶大な権力を持つスタンですら、イスラーム法に違反した勅令は下せなかった。この意味で、オスマン帝国はもっとも完成されたイスラーム国家であった。」

このように評価高く記述されている。東京書籍はオスマン帝国のみの章を設けており、出版社3社のなかで内容量も一番多くなっていた。他の2社では中央アジアの中の歴史の一部として取り上げられており、このことから東京書籍はイスラーム史のなかでオスマン帝国を特に重要視しているのではないかと考えた。

帝国書院もまた、イスラーム帝国としてのオスマン帝国という小テーマをつけるほど、イスラーム国家であることを強調しており、力を保持していたことも記述していた。

「イスラーム帝国であるオスマン帝国内では、通例にしたがってキリスト教徒・ユダヤ教徒などの諸宗教の共同体は「啓典の民」として保護を与えられていた。このためユダヤ教徒・ギリシア正教徒アルメニア教徒などが、独自の通信網によって商業で活躍した。

こうしてオスマン帝国は、スレイマン1世のもとで最盛期を迎え、イスラーム諸国のみならずヨーロッパ世界を圧倒する勢威を誇った。」

一方、山川出版社は他の2社に比べ、オスマン帝国に関する記述がもっとも少なく、オスマン帝国に対する評価に関する記述は見られなかった。

以上が、イスラームに関する教科書の記述内容の比較分析と気づいたことである。

次に、教科書ごとのコラムの比較をしていく。教科書ごとのコラムの数・内容もそれぞれの教科書の特徴を捉える上で重要になってくる。以下の表がイスラームに関するコラムの内容である。

(表2)

山川出版社	なし
帝国書院	<ul style="list-style-type: none"> ・シャリーアとイスラーム社会の家族（六信五行の細かい説明あり） ・「剣かコーランか」というイスラーム像の誤り ・シーア派とスンナ派の歴史 ・製紙法の伝播 ・インド的伝統にのっとりたヒンドゥー院の破壊 ・イスラーム世界での砂糖の普及
東京書籍	<ul style="list-style-type: none"> ・イスラーム法 ・シーア派とスンナ派 ・イスラーム世界のキリスト教徒 ・一神教の歴史観 ・街の景観 ・公衆浴場（ハンマーム） ・ギリシア語からアラビア語へ

一番特徴的であったのは、山川出版社であり、コラムが一つもなかった。教科書のページの下に説明が必要な単語の解説が書かれているのみであった。他にも山川は、メインページとは別の発展学習に当たるような特設ページはなく、代わりに教科書の部ごとの最後に「まとめ」の内容が記載されている。帝国書院は、コラムの内容が出版社3社の中で一番豊富であり、イスラームについても宗教の特質など細かく記述してあった。中でも「剣かコーランか」というイスラーム像の誤り」というコラムでは、長い間もたれていたヨーロッパ世界での間違っただけのイスラーム像について記述されており、歴史において視点を変えることの重要性を唱える内容がはっきりと書かれていた。最後に東京書籍は、イスラームの特報に関するコラムがある程度記載されていたが、帝国書院ほど、詳細に記されていない。

そして、出版社 3 社の教科書内でのイスラーム史の配当
時数、ページ数、扱っている世紀を比較する。以下の表では、
指導要領における内容(3) (ウ) 「イスラーム世界の形成と拡大」
に該当する教科書部分での比較である。

(表 3)

	配當時数	ページ数	扱う世紀
山川出版社 「イスラーム 世界の形成と 拡大」	7 時間	20 ページ	7 世紀～ 16 世紀初め
帝国書院 「イスラーム 世界の形成と 拡大」	4 時間	15 ページ	7 世紀～ 15 世紀
東京書籍 「イスラーム 世界の形成」	5 時間	16 ページ	7 世紀 ～13 世紀

教科書の編纂を比較すると帝国書院は、指導要領の内容
(2)「諸地域世界の形成」と(3)「諸地域世界の交流と再編」を
まとめて 1 部として扱っている。一方、山川・東京書籍は指
導要領に即して内容(2)を 1 部 (編) 内容(3)を 2 部として扱っ
ている。また、内容(4)「諸地域世界の交流と変容」を帝国書
院では「海洋による世界の一体化」という題目をつけてお
り、帝国書院ならではの特徴となっている。世界の結合・変
容に海上交易が深く関わっていることを重要視しているこ
とを示しているのではないかと考えた。

他に、イスラーム史とは少し離れてしまうが、教科書での
授業の配當時数の合計が、山川出版社・東京書籍では 140 時
間を想定しているのに対し、帝国書院だけ合計配當時数が
110 時間となっており、かなり少なくなっている。イスラーム
史の配当字数が 3 社のなかで一番少ないのもこれが要因
となっていると考えられる。この理由として、帝国書院は、
「一体化する世界」という題名の特設ページを教科書の要
所所に設置し、グローバル化に対応する学習を促している
。また、他にもそれぞれの地域の歴史の特設ページも充実
していることから、これらの内容も授業で扱うことを想定
しているため、授業の合計配當時数が少なくなっているの
ではないかと考えた。

最後に三つの出版社それぞれの編纂趣意書に記載されて
いる指導要領の内容と教科書の内容の対照表を比較してみ
た。その結果、どの出版社も、イスラーム世界について特に
扱われているとした内容(3)「諸地域社会の交流と再編」から
内容(4)「諸地域世界の結合と変容」にかけての流れが、内容
(3)では「一体化への予兆」があり、そこから内容(4)において
「一体化する世界」になる、といったような記述にしてい
る。

指導要領自体には、「(3)ユーラシアの内陸及び海域のネッ
トワークを背景に、諸地域世界の交流が一段と活発になり、
新たな地域世界の形成や再編を促したことを把握させる。」
“(4)アジアの繁栄とヨーロッパの拡大を背景に、諸地域世
界の結合が一層進んだことを把握させるとともに、主権国
家体制を整え工業化を達成したヨーロッパの進出により、
世界の構造化と社会の変容が促されたことを理解させる。”
というふうに、指導要領内では細かくは一体化への予兆な
どについては言及していない。つまり、内容(3)の「一体化へ
の予兆」から内容(4)において「一体化する世界になる」とい
う流れの見方は、この出版社 3 社それぞれが指導要領、世
界史の解釈が一致しているところではないかと考える。

以上が、3 社の世界史 B の分析で気づいたことである。

ところで、2022 年度から高等学校用の学習指導要領が実
施されるが、現行世界史と関連ある教科として「歴史総合」
と「世界史探究」がある。「歴史総合」では、日本史に重点
を置いた叙述がなされるとも言われているが、その一方で、
グローバル化もキーワードとしてあげられており、それら
は現代的諸課題の形成にもつながっていることが指摘され
ているが、当然、異文化理解の問題も関連して考えるべきと
思う。こういった歴史総合の性格の中で、新しく作られた各
社教科書の中でイスラームがどの程度、どのような形で叙
述されているのかにも関心を向けざるを得ない。

よって、近代におけるイスラームの記述の分析は「歴史総
合」の教科書で分析を行なった。分析方法は、「世界史 B」
と同様の手法で、いくつかの項目を設けて、イスラーム史に
関する記述を比較していく。分析の対象は以下の三つであ
る。

(7) 山川出版社『歴史総合 近代から現代へ』(歴総 707 :
2022 年発行)

(4) 帝国書院『明解 歴史総合』(歴総 706 : 2022 年発行)

(ウ) 東京書籍『詳解 歴史総合』(歴総 702 : 2022 年発行)

世界史 B の比較対象で扱った、山川出版社、帝国書院、東
京書籍 3 社の歴史総合の教科書を扱っていくこととする。
先ほども述べた通り、歴史総合は近代中心の科目であるた
め、全近代とは少々ずれてしまうが、世界史 B で分析した
内容につながるイスラーム社会の動向を分析していく。具
体的には、以下の諸テーマについて各社教科書の記述の検
討をおこなう。

①オスマン帝国 (16 世紀)

②オスマン帝国 (19 世紀)

③現代のイスラーム

世界史 B の教科書比較においてもオスマン帝国を扱った
が、ここではさらに近代化していくオスマン帝国を分析し
ていく。

ここで、『高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示)』に

おける第2章第2節「地理歴史」第2款 第3「歴史総合」を見ると、イスラーム世界と関連する記述があると考えられる箇所は、以下の部分ではないかと考える。

2 内容

D グローバル化と私たち

(1) グローバル化への問い

冷戦と国際関係、人と資本の移動、高度情報通信、食料と人口、資源・エネルギーと地球環境、感染症、多様な人々の共存などに関する資料を活用し、課題を追究したり解決したりする活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 次のような技能を身に付けること。

(ア) 資料から情報を読み取ったりまとめたりする技能を身に付けること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

(ア) グローバル化に伴う生活や社会の変容について考察し、問いを表現すること。

次に、比較してまとめていった際に気づいたことをまとめていく。

① オスマン帝国 (16 世紀)

16 世紀のオスマン帝国は最盛期の時期であり、国家も交易も繁栄した時代である。どこまで詳細に記述されているか比較すると

山川出版社は以下のように、詳細にイスラーム国家の特徴について記述はしていないが、オスマン帝国の制度や貿易など幅広く端的にオスマン帝国についての記述がなされていた。

「16 世紀以降の西アジア・南アジアでは、オスマン帝国・サファヴィー朝・ムガル帝国という 3 つのイスラーム帝国が並行して繁栄した。これらの帝国は多数の民族を統合し、国内外の流通も盛んで、国際性が豊かであった。」

帝国書院は、以下の通り、ここでも交易ネットワークを重要視していた。

「オスマン帝国・サファヴィー朝・ムガル帝国は、インド洋と内陸部を結ぶ商業ルートを整備し、互いにつながり、繁栄していた。」

この他にも貿易に関する記述が見られ、国家の制度よりも交易の記述が多いことからイスラーム国家の繁栄＝交易・商業の発展であるとしていると考える。

一方、東京書籍では 2 社のような三つのイスラーム国家

に関する記述や交易に関する記述はいっさいなかった。

② オスマン帝国 (19 世紀)

19 世紀のオスマン帝国は近代化に乗り出した時期であり、タンジマートなど改革を開始した時代である。

山川出版社、帝国書院はオスマン帝国の衰退から近代化に向けた動きに関してほぼ同じ内容を記述していたが、東京書籍は 16 世紀での比較と同じようにオスマン帝国の近代化に関する記述が最も少なかった。また、

「帝国内のキリスト教徒保護についての要求もあったことから、スルタンのアブデュル・メジト 1 世は 1839 年にギュルハネ勅令を出し、タンジマートとよばれる西歐的近代改革を開始した。」

以上のように、キリスト教を関連させてタンジマートの記述をしていた。他の 2 社は特定の宗教名は出さずに宗教の平等をうたったとだけ記述されており、キリスト教との関連を重視しているのではないかと考えた。

③ 現代のイスラーム

現代のイスラームは、最初の一般的なイスラームのイメージでも述べたように、9.11 の同時多発テロやその後の紛争の印象が強く、野蛮なイメージを持たれている状況である。しかし、実際は全く異なっており、イスラーム理解を深める必要があることを本研究では解いているが、新教科書「歴史総合」ではどのような記述がなされているのか見ていく。3 社の中で最も詳細に 9.11 について記述がなされていたのは山川出版社であった。他にも

「また、アメリカ対イスラームという二項対立を強調した対テロ戦争は、「イスラームの脅威」という言説を世界に拡散させ、人々を分断することになった。」

このように、安易なイメージが普及してしまったことについても触れている。

帝国書院もまた、事件の詳細を多く記述してはなかったが、以下のようにイスラームに対する差別について触れており、差別に関するコラムも記載していた。

「こうしたなかで欧米諸国ではイスラームとテロを結び付けて、ムスリムの住民を差別する風潮が高まった。」

東京書籍は 9.11 についての記述もまた少なく、イスラームへの差別に関する記述もいっさいなかった。

以上が、3 社の歴史総合の分析で気づいたことである。これらのことから、山川出版社、帝国書院は近代化におけるイスラームとしてヨーロッパなどに受けた影響について細か

い内容を記載しているのに対し、東京書籍は明らかにオスマン帝国に関する記述が少なく、またイスラームとしてではなくアジアに包括してヨーロッパなどに受けた影響を記載していることがわかった。

5. まとめ

山川は、コラムや特設ページがないため、イスラーム史の歴史の記述は3社の中で一番多かったが周辺地域におけるイスラームの記述は一番少なかった。イスラーム史の記述内容は多かったが、イスラームの影響など歴史の深さは浅いように思われた。しかし、イスラームによる地中海世界の変化・影響や、ムスリム商人の活躍など抑えておくべきポイントの内容はしっかりと記述があることがわかった。山川出版社は指導要領に即して、正統な世界史を記述している傾向があると考えた。

東京書籍は、オスマン帝国の記述に見られるようにイスラーム史について詳細に記述しているところと、そうでない部分の差が見られた。ムスリム商人に関する記述もまた全ての事象には記述されていなかった。他にもイスラーム教が世界に与えた影響などの発展的な内容の記述も見ることにはなかった。一方でキリスト教やヨーロッパに関する記述では詳細に書かれることが多い傾向にあると考えた。

帝国書院は、編成の仕様が他の2社と違ったり、他の2社ではあまり見られないネットワークという言葉が多用していたりするなど、特徴が多く見られた。そこで、この帝国書院の著作者を見てみると、川北稔・桃木至郎・山下範久・杉山清彦など、「グローバルヒストリー」に関する研究を行っている研究者の方々が多く編纂に関わっていることがわかった。「グローバルヒストリー」とは従来の歴史ではなく、新しい視点で歴史をみていくことである。編集趣意書にも、特設ページの「一体化する世界」においてネットワーク論、世界システム論を軸に教科書を展開したと記載されていた。ネットワーク論・世界システム論も「グローバルヒストリー」の中の考えであり、教科書にも反映されていることがわかる。だからこそ、「イスラーム・ネットワーク」という言葉を軸に、現在のイスラームの研究に即した内容が記述されているのではないかと考えた。

これらの結果を踏まえ、自分は帝国書院がイスラーム理解の教科書として有用なのではないかと考える。

なお、ここでは扱わなかった新教科の一つである「世界史探究」の教科書は、まだ入手することができてないが、これについても今後できるだけ、早めに情報をつかんでいきたいと思う。特に今回扱った「世界史B」と、どのような点で相違するのか、それは世界史理解の促進、とりわけイスラーム理解の促進にどの程度役立つのものなのかを考えていきたい。

参考文献

- 『高等学校学習指導要領（平成11年告示）』
『高等学校学習指導要領（平成30年告示）』
（教科書）『詳説世界史B 改訂版』（山川出版社、2021年）
（教科書）『新詳世界史B』（帝国書院、2021年）
（教科書）『世界史B』（東京書籍、2021年）
荒井正剛・小林春夫編著『イスラーム／ムスリムをどう教えるか ステレオタイプからの脱却を目指す異文化理解』（明石書店、2020年）
小川幸司（「世界史教育はオリエンタリズムを再生産していないか」）（<http://www6.econ.hit-u.ac.jp/areastd/event/ogawa.pdf>）
大瀧 庸平「単元を通して多面的・多角的にイスラームを考える授業ー世界史A「アジアの繁栄と世界～イスラーム史～」の指導を通してー」（<https://www.nipec.nein.ed.jp/kk/b025/h29/PDF/2906ootaki1.pdf>）
高木徹也「地理歴史科における異文化理解の研究」（島根県HP https://www.pref.shimane.lg.jp/education/kyoiku/kikan/matsue_ec/chousa_kenkyu/h15h20kenkyuseika/15neudo.data/h15-c1.pdf）
群馬県高校教諭「異文化を理解するための世界史授業案ーイスラームの授業の授業を通して」（帝国書院HP https://www.teikokushoin.co.jp/journals/history_world/pdf/200610/history_world200610-12-14.pdf）
吉村憲二「『イスラーム』と『ムスリムの生活』を学ぶ」（帝国書院HP https://www.teikokushoin.co.jp/journals/geography/pdf/201301g2/05_hsggbl_2013_01g2_p11_p14.pdf）
家島彦一『イスラーム世界の成立と国際商業 国際商業ネットワークの変動を中心に』（岩波書店、1991年）
宮崎正勝『イスラーム・ネットワーク アッバース朝がつけた世界』（講談社選書講談社選書メチエ、1994年）
佐藤次高編『宗教の世界史 11. イスラームの歴史 1 イスラームの創始と展開』（山川出版社、2010年）
小杉泰編『宗教の世界史 12. イスラームの歴史 2 イスラームの拡大と変容』（山川出版社、2010年）
森川哲雄・佐伯弘次『内陸圏・海城圏 交流ネットワークとイスラーム』（権歌書房、2006年）